

## 図脳論－影絵の裏を診る－

友人の加藤晴朗先生（信州大学泌尿器科講師）が手術書「イラストレイテッド泌尿器科手術」（医学書院）を上梓した。手術手技と手順を、自らの手で千数枚に及ぶイラストとして描いた大作である。この手術書の作成過程の中で、彼は「図脳論」という考えに行き着いた。物事を説明したり理解したりする場合、図や絵のほうが言語より具体的で優れていると考えた。その図形を認識し理解するのが頭の中にある図脳の働きであるというのだ。そして、頭の中の図脳を鍛え上げ進化させることが、認識をより深めることになる」と述べている。

たとえば、彼は図脳を象徴的に示す小話を紹介している。「AさんとBさんは別々の川で砂金採りをしていて、Aさんの川から砂金がたくさん採れるが、Bさんの川からは砂金がまったく採れない。ある日、BさんはAさんをだましてお互いの川を交換することにした。ところが交換後も、Bさんは砂金がまったく採れない。Bさんは、Aがみんな採りつくした、と思った。一方Aさんの方は、前の川よりいっぱい採れる。Bはなんていい奴だ」と。

名探偵ポアロは、「頭の中の目（小さな灰色の脳細胞）は、実際の目より良く見えますよ」と語っているが、この目もまさに加藤先生のいう図脳と同意義と捉えることができる。その能力を鍛えることが、「見えないものを見える」また「他人が気づかない物を発見する」ことに繋がる。視覚で知覚する影絵は単なる斑点のようにはしか見えないが、影絵の裏側にある真絵を当てるためには、観察力や想像力、問題意識で鍛え上げた図脳を活躍させることが必要になる。このことは、われわれ医師が患者を診断するときに求められるエッセンスそのものである。

（一燈）



## 大通公園を望む窓辺から

### そろそろ曲がり角

先日、札幌で覚醒剤を使用した疑いで逮捕された男が、警察官の隙をみて高級外車で逃走するという事件がありました。この男は生活保護を受けていましたが、車を3～4台所有していたそうです。その後、新聞・TVで生活保護の不正受給問題が良く取り上げられるようになりました（生活保護受給者は自動車の所有は認められておりません）。また2007年には、滝川市で元暴力団組員に2億円以上のタクシー代を騙し取られるという事件が発覚しました。

一方、1987年には、札幌市白石区で生活保護を申請したがなかなか受理されず、母子家庭の母親が餓死した事件がありました。生活保護制度の問題点として、本来、生活保護により救済されるべき人が救済されずに苦しい生活を強いられている反面、少ないながら不正に受給する人もいるということだそうです。

札幌市の場合、行政が把握している不正受給者は生活保護世帯全体の約1%だそうです。先の2例は元暴力団員ということで、不正も悪質あるいは高額なもので、特殊なケースだと思います。しかし、医療機関を受診する生活保護の患者さんを診察して感じることは、車で通院したり（もちろん本人のものかどうかはわかりませんが）、本人負担がないせいか薬をたくさん欲しがることが多いということです。

2012年3月、生活保護受給者が210万人と過去最高となったそうです。厚労省からも制度の見直しを始め、保護費の半分を占める医療扶助での自己負担の導入や、家賃滞納が増えている住居費を直接納めるなど、かなり革新的な内容が提示されています。

ロンドンオリンピックでは日本のメダル獲得数は過去最高だったそうです。オリンピックで各種の競技を観戦して感じたことは、日本人選手はフェアで卑怯なことはしないということです。しかし最近の国内でのいくつかの出来事、大津の中学生自殺事件や大阪地検の証拠改竄事件、証券会社のインサイダー取引などをみていると、モラルや良識では解決できないところまで世の中がきてしまったように感じます。性善説では解決できない問題が、教育、司法、医療、経済あらゆる分野で起こっているようです。規則や法律は嫌いですが、そろそろなんらかの歯止めをかける時期にきていると感じます。

（TS）